## 2016年11月11日(金)山形新聞に掲載!

同線は全長43まで、最上 つながることが期待される。

けて独自の対策を講じており、両者の連携が利用拡大に

精力的に取り組んできた。JR側も利用者数の増加に向 して1年がたった。この間、植樹やイベント開催などに

が最上川・陸羽西線活性化委員会(高橋茂会長)を設立 性化や景観保全に取り組もうと、戸沢村と庄内町の有志

利用者数が減少の一途をたどるJR陸羽西線沿線の活

に比べ5分の1まで落ち込ん 学客の減少などで、約30年前 015年度で391人。 を表す平均通過人員は、2 地域と庄内地域を結ぶ唯 ても利用者数は少なかった もと県内の他路線と比較し 店によると、新庄―余目間の の鉄路。 JR東日本山形支 1日1き当たりの利用者数 人口減に伴う通勤・通

郎ゆかりの史跡など観光資源 松尾芭蕉や幕末の志士清河の めとする最上峡の景観美、最 沿線は幸いにも、紅葉をはじ には、観光客の確保が重要だ。 上川舟下り、幻想の森、俳ー 利用者増に活路を見いだす

## 志の陸羽西線活性化 戸沢·庄内有

が多い。これらを生かし、利 のが、最上川・陸羽西線活性 用者の増加、さらには地域活 化委員会と、JR新庄駅・酒 性化を目指そうと組織された 最上川·陸羽西線活性化委 Rとの連 蕉乗船の地を巡る参加者

に意欲を見せる。



員会が開催したイベント 「最上川・芭蕉しろうとハイ (俳句)国際選手権」で芭 月14日、新庄市

田駅の若手社員らによる「陸 羽西線活性化プロジェクト」 持ち味生かし、利用拡大へ か、 が意見交換会を開いたのを機 るなどしてきた。同プロジェ のハイキングを楽しみながら し、植樹による景観保全のほ クトは昨年、両駅の若手社員 俳句を詠むイベントを開催す にスタート。各駅を回る「陸 最上川舟下りや羽黒古道

親子など669人が参加し ~9月に開催し、夏休み中の

をつくりたい」と、活動継続 光を楽しんでもらえる仕組み だけでなく、各駅を下りて観 る。同プロジェクトの担当者 も「陸羽西線の利用者の増加 どの地道な活動で土台をつく 的を持つものの、これまで互 いの活動を認知していなかっ 沿線の活性化」という同じ目 し出たいと思っていた」と語 ってから、いずれは連携を申 **活動を始めたばかり。 植樹な** たという。高橋会長は「まだ 両組織は「陸羽西線とその

## と広がるはずだ。ボランティ したとして、委員会とJRが JRの企業力。両者の持ち味 アで集まった有志の柔軟性と 連携できれば活動の幅はぐつ げてほしい。 を生かして陸羽西線を盛り上 例えばイベント列車を企画

同委員会は昨年9月に発足

羽西線スタンプラリー」

(新庄支社・井上萌々子)